



Title	移民都市における定住空間構造の内因分析に関する研究
Author(s)	Humberto, Tetsuya Yamaki
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33872
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	ウンベルト・テツヤ・ヤマキ Humberto Tetsuya YAMAKI
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	第 6 4 6 8 号
学位授与の日付	昭 和 59 年 3 月 24 日
学位授与の要件	工学研究科 環境工学専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	移民都市における定住空間構造の内因分析に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 上 田 篤 教 授 末石富太郎 教 授 岡田 光正 教 授 橋本 奨

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、未開地をきり開くことによって形成された新都市としての移民都市の定住空間構造を、日独伊の移民都市開発における人間環境形成の比較という視点から検討したものである。

内容は、緒論、本論 3 編、結論及び展望から構成されている。第 1 編においては移住地という広域空間における開発プロセスをとりあげ、移住地の発生、計画、形成プロセスを中心に解析し、第 2 編においては移住地という広域空間の中心地としての計画市街地をとりあげ、計画市街地の発生、形成プロセス、空間構造を解析し、第 3 編においては定住空間の最小限のユニットとしての移民住居をとりあげ、移民都市構造がどのようにして住居の内部空間に照射され、また、基底条件としての旧大陸文化的な伝統とどのようなかわりを持っているかを考察している。

論文第 1 編は 4 つの章からなる。第 1 章では、日系移住地について解析し、小学校がその中心的役割を持つことを分析している。

第 2 章では、独系移住地について解析し、川が開拓基本線であり、また、集落間は理想距離にあることに着目しつつ分析している。

第 3 章では、伊系移住地について解析し、礼拝堂が中心的役割を持つことを分析している。

第 4 章で以上の日独伊三系移住地の全体構成を律するモデルと開拓手法を中心に比較考察を行っている。

論文第 2 編は 4 つの章からなる。第 1 章では、日系計画市街地について解析し、市街地構造上、小学校のもつ役割と街区空間の変遷過程を中心に分析している。

第 2 章では、独系計画市街地について解析し、大通りのもつ役割と不定形な街区空間の構造を分析し

ている。

第3章では伊系計画市街地について解析し、広場のもつ役割について分析している。

第4章で日独伊系計画市街地を、初期プラン、広場及び空間構成を中心に比較考察を行っている。

論文第3編は4つの章からなる。第1章では、日系住居について解析し、その変遷、住空間におけるプライバシーの稀薄性及び「見えない冊」をもつ敷地構造について分析している。

第2章では、独系住居について解析し、合理的伝統様式と「3重の柵」をもつ敷地構造について分析している。

第3章では、伊系住居について解析し、地下室付伝統様式と「2重の柵」をもつ敷地構造について分析している。

第4章では、日独伊系の移民都市の農村と市街地の住居の敷地構造比較と、住空間の継承と変容の要因について考察を行っている。

総括及び結論では、第1編から第3編までの結論を総括し、そのうえで、移民都市における定住空間の構造から、移民都市は計画都市であり、開発主体となった人々の人間環境に対する観念が強く作用すること、及び移民都市を包括的にふくんだ組織原理があることを結論している。

論文の審査結果の要旨

本論文は、現代都市計画が機能重視に偏って多くの問題を露呈している状況にかんがみ、計画都市としての移民都市の開発について考察し、そこでは主体となった民族の観念に基づく計画原理及び移民社会において理想化された都市イメージに基づく生活価値意識が大きな役割を果たしていることを詳細な現地調査を通じて論じたもので、その主要な成果は次の通りである。

- (1) 宗主国の支配を前提とする植民都市と異なり、日本人、ドイツ人、イタリア人を大量に移入した移民都市は計画都市であること及びその計画には主体となった民族の観念が計画原理となって強く作用していることを明らかにしている。
- (2) 移民都市の計画原理は、日系移民の場合には子供の教育と将来を重視する子孫優先型、独系移民の場合には共同体内の相互扶助と協同施設を重視する共同体優先型及び伊系移民の場合には核家族内の夫婦の安定を重視する核家族優先型であることを見出し、かつ、それらがそれぞれの社会の構成原理となり、日系の場合は日本人会、ドイツ系の場合はアソシエーション、イタリア系の場合は教会組織を構成していることを明らかにしている。
- (3) さらに移民都市の具体的な形成には、それぞれの移民の生活価値意識が深く関わっていること、その生活価値意識は必ずしも母国のそれと同一ではなく、また現地で容易に生み出されるものでもなく、移民社会における理想化された都市イメージの追求の結果生じたものであることを指摘している。

ブラジル南部地域の移民都市においては比較的自由な都市づくりが行われたのにもかかわらず、以上のような社会と空間の平衡関係が存在することを明らかにしたことは、これからの都市計画に重要な知

見を与えるものであり，環境工学上寄与するところが大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。